

ポスターセッション

海の環境啓発活動団体と連携した科学館 ならではの取り組み

福岡市科学館 事業推進グループ 板垣早織

福岡市は、北に海(博多湾)、南に山(脊振山)と自然豊かな市である。今夏、福岡市科学館では、博多湾を学ぶイベントを実施した。海の環境啓発としての展示とダイバーが生中継で海中の様子を伝えるサイエンスショーを組み合わせたもので、博多湾の環境を守りいきものを育むことを主活動としている地域の法人団体と連携して取り組んだ。海の豊かさを海から離れた科学館で伝えるという新たな手法として事例紹介する。

「出会いの場」であり続ける展示室 —展示交流ってなに？から 10年—

滋賀県立琵琶湖博物館 中村久美子
北村美香

琵琶湖博物館では開館当初から、展示を通して交流する事で来館者の興味を引き出すことを目的に「展示交流員」を各展示室に配置しており(呼称は98年~)、来館者との展示交流を大切にしてきた。10年前の議論から、「展示交流」とは何か現状を踏まえ再整理するため、展示交流員が行う「交流員と話そう」を例に来館者の変化や新しい発見についてまとめ、展示室が出会いの場であり続けるために展示交流が果たす役割について議論する。

「かはくのモノ語りワゴン」における外国語、 障害者対応の取り組み

国立科学博物館 常設展示・博物館サービス課 園山千絵
志津田加奈子
相沢紗百合

国立科学博物館では、常設展示室内に移動式のワゴンを設置し、実物の標本などを用いて、展示に秘められたポイントなどを5分程度でボランティアが来館者に紹介する事業、「かはくのモノ語りワゴン」を実施しています。本事業における外国人来館者対応、聴覚障害、視覚障害のある来館者対応の取り組みを紹介します。

宇宙素粒子系基礎科学の“聖地” からの多角的な発信

ひだ宇宙科学館 飛騨市神岡振興事務所 宇宙物理学支援室 高知尾 理

岐阜県飛騨市には、日本に2度のノーベル物理学賞をもたらした素粒子物理学実験の研究拠点がある。飛騨市が整備した「ひだ宇宙科学館カミオカラボ」は道の駅内に併設されていることや入館料無料という敷居の低さも後押しし、開館半年余りで10万人の入館者を突破した。国民の持続的な理解が不可欠な基礎科学の広報と、立地地域の振興という2つの使命を持つ当館が整備された経緯と現在始めている事業、今後の展望を紹介する。

社会のニーズに寄り添う公開天文台 ～南阿蘇ルナ天文台の取り組み～

南阿蘇ルナ天文台 天文事業部 宮本孝志
武藤祐子

本発表では、現在、南阿蘇ルナ天文台が取り組む社会的活動の中から、1) 日本公開天文台協会(JAPOS)での天体解説員を対象とした解説技術の研修活動、2) 第3世代型天体観察会『星空体験ツアー』、そして、3) 第4世代型天体観察会(インターネット天文台)など、従来の公開天文台施設・設備のあり方に縛られず、また、急速に変化する社会ニーズに対応した“天体や宇宙を観察して学び楽しむ”ための3つの活動を報告する。

来館者と街に出て「サイエンススポット」を探検！ ー市民参加で街の科学的情報を蓄積・展示する活動ー

福岡市科学館 事業推進グループ 藤瀬雅子

福岡市科学館では「いたるところに科学がある」をコンセプトに、館内体験がその場限りとならず、来館者が日常のなかで科学的な視点をもつことにつなげる活動をしています。その一つとして、街中で科学や技術を感じられるサイエンススポットを発見・探究するフィールドワークを実施、参加者と収集したスポット情報は館内展示に登録していきます。来館者の視点で得られた知見を展示に反映していく一連の活動について紹介します。